

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

迎えた古希 次の風景楽しみに

わたし色

生活情報誌「悠悠と」
編集長・真鍋康利さん



先週69歳の誕生日を迎えました。決して油断していたわけではないのですが、いつものような普通のことのように思っていました。しかし、なんと「古希」は数えて祝うそうです。プレゼントをいただき、そこにくっきりと「祝古希」と書かれていたのを見て、改めて自分の年齢を意識してしまいました。

杜甫と違って、酒代のツケはないし、この時代では70歳もまれではありません。しかし、自分の中では感慨深いものがあります。よへへへまできたな、と。

60歳になったとき、これは大変なことになったと感じ、65歳には介護保険証が届くなどして、いよいよか、と思い知らされ、そのいずれのときも愕然としたものです。しかし今回がもっとも衝撃的でしたね。もちろん、この先また驚かされることもあるかもしれませんが……。

自分のこれまでを振り返ると、後悔はありませんが、反省することはいくらでもあります。

15歳は「志学」、学問を志したかと問われれば首をかしげざるを得ないし、30歳の「而立」は、独立した立場を持つたか疑問です。

40歳は「不惑」で、直前に北海道へ戻る決心をしたときには迷ってはいなかったと思います。50歳は「知命」、このころ独立したのは、天命を知ったつもりになっていたのでしょうか。

しかし、30歳の而立に当てはめると、孔子さん方より20年遅れたことになります。60歳は「耳順」。素直に聞けるものは聞けますが、そうでもないものはどうにもなりません。相手によるのです。そして70歳は「從心」、これは結構自信があります。心に従っても決して道をはずすことはありません。

それにしても昔の偉人はよいことを言っていますね。リンカーンの言った「男は、40歳過ぎたら自分の顔に責任を持つて」は心に響きます。しかし、寿命が延びた現代では少し上乘したほうがよいのかもしれない。

このたび晴れがましく「古希」を迎えましたが、この後、77歳の「喜寿」、80歳の「傘寿」、88歳の「米寿」、90歳の「卒寿」、99歳の「白寿」、そして100歳の「百寿」と続きます。周りには元気に活躍される先輩方がたくさんいらっしゃって、いつも圧倒されています。

もし自分がそれらに到達することができたなら、そのとき自分がどんなことを感じるのか、どんな風景を見るのか、できるのか楽しみであり、怖くもあります。もちろん頭がしっかりしていて、感じる力が残っていたらですが。